

北国雪賦 (1982年 宮城合奏团委嘱)



上野 晃 (音楽評論家)

練馬は石神井公園の東方と西方に互いの住居を馴染ませていた小生が、タクシーに同乗して長澤勝俊さんをすぐ門前までお送りしたのは、一年少々まえだった。1964年の日本音楽集団結成以来四十数年、この現代邦楽のメッカ乃至ロータリーにあって長澤さんは、作曲と組織の運営に携わってきた。心より御礼を述べねばならないが、そもそも書齋派や孤高型の人ではなく、最初からいわば現場の音楽家として、人形劇団<ブーク>の時代、記録映画の音楽を手がけた時期から、長澤流の営みは続いている。

太平洋戦争真っ只なかの二十歳、作曲熱が昂じて日大芸術学部に入學したものの、わずか三ヶ月で学徒出陣、スマトラの戦場へ送り込まれた彼は、敗戦までどうにか生き延び、二年の抑留生活のあいだアコーディオンを奏するようになり、ついに大学には戻らなかった、復員後の身を援けることになったアコーディオンとともに入った人形劇団での思想的開眼、そして四年間にわたる清瀬保二に作曲師事が、長澤の進路を決定的にした。アコーディオンを肩に人形連と全国巡業の旅先で接した民俗芸能の数々、子供たちのための新しい劇音楽の想像。日本音楽集団初回演奏会に置ける《子どものための組曲》、1966年の第四回での《子供の四季》や《人形風土

記》は、人形劇団生活での体験なしに考えられない。こうしたさまざまな現場や厳しい環境、芸術諸分野の接触をつうじて、長澤作品は<ナガサワぶし>と呼ばれるほど、明色のメロディアスで流動感の快い音楽が、誰からも親しまれていく。が、すでに五十曲を超える邦楽器のための作品群像は、1980~90年代にかけて情緒的はテクステアからそと抜け出て、ストイックともいえる抒情を聴くシーンが少なくない。敏感にしてデリケートな音色を伝えひろげる楽案が目立つようになる。

宮城合奏団の委嘱によって1982年に作曲された《北国雪賦》は、まさにこの期の長澤作品といえる。冬の東北地方に昔から伝わる雪祭りの伝統行事に耳目を注ぎ、酷しい自然と関わりながら日常を営む人たちの心身情感を映し描いている。箏I/箏II/十七絃/三絃が、ほぼ同数奏者で合奏。第一楽章<かまくら>は、雪室に水神を祭って豊年を祈り、鳥追いの唄をうたったり、つまり小正月の行事を映す。笛・太鼓の音は聞えず、静かなうち・その空間からいくつものファンタスティクな音が漂いひろがっていく。第二楽章<ぼんてん>は、大きな御幣を氏神に奉納する熱烈勇壮なイベント。雪に閉ざされた人たちのエネルギーが燃え上がり昂揚する姿を映している。



於 朝日生命ホール 昭和57年度文化庁芸術祭参加 宮城合奏団演奏会 S. 57. 11. 5

「北国雪賦」初演ステージ 宮城合奏団



「北国雪賦」収録CD